

書 評

中島岳志、『ナショナリズムと宗教—現代インドのヒンドゥー・ナショナリズム運動』春風社、2005年、384p.

著者は足掛け7年にわたりヒンドゥー・ナショナリズム（以下HN）研究に従事してきた。著者はその研究途上、すでに前著（[中島2002]）を上梓している。本書は著者の博士學位論文（2004年）を基としたものであり、前著の内容をさらに深化して議論している。本書はHNの専門書としては日本初の単著でもある。

早速、各章の内容を概観して検討したい。第1章「公共圏・ナショナリズム・宗教」は本書の理論的枠組を呈示するもので、まず従来の世俗化論を批判し、宗教が政治・経済といった「公共圏」において果たす役割の重要性について述べ、宗教の脱私事化が進行している現状を指摘する。そして宗教の脱私事化はウチとソトを区分する植民地的差異構造への批判から生じたものとし、HNをヒンドゥー的「ダルマ」精神の復興運動であると論じる。そのうえで著者はHNに多くの民衆が加わっていく状態を分析するには既存のナショナリズム論だけでは不十分であると、民衆の「善き生の追求」「宗教復興的心性」といった多様な主体性にも目を向けるべきであると主張する。

専門書ではないという制約もあったが、前著では既存のHN研究との関わりが明らかでなかった。第1章はその不足点を補足する

ものである。同様に前著ではHNの歴史について駆け足的な議論しか展開しなかったが[中島2002: 165-167]、それにも第2章「ヒンドゥー・ナショナリズムの歴史」で十分な紙面を充てている。ここでは、「ヒンドゥー」というカテゴリーの確立に植民地時代の公的社會観が大きな役割を果たしたこと、HN運動がインド独立運動と並走していったこと、国民會議派のポピュリズム政治によって加速していったことを、アオーディヤー問題とも照らし合わせ議論している。この章では、1980年代以降にHNが興隆したという時、その背景には大量消費社會の到来(pp.110-113, pp.129-135)や中間層イメージの流布(p.123)があったことが論じられている。そうした記述にはポストモダン性に關する議論（たとえば、[Turner 1994: 3-19]）の影響が見られる。著者には宗教の脱私事化をポストモダンといった文脈で見ることに消極的な姿勢が散見されるが、こうした議論との関連づけを行ってほしかったと思うのは評者だけであろうか。

第3章「ヒンドゥー・ナショナリズム運動の組織と理念」では、HN運動を牽引するRSS(民族奉仕団)とその系列諸団体サング・パリワールの組織実態と活動を論じている。著者はサング・パリワールの多元的な活動に注目し、HN運動では上からのナショナリズムの一方向的押しつけがなされるだけではなく、民衆の多様なニーズをしたたかにくみ上げることによって運動の拡大が進んでいる、と論じる。その後、分析はヒンドゥー・ナショナリスト（以下HNst）の理念に進み、

彼らのイデオロギーは「真理は遍く一つであり、宗教の違いは同じ真理の別の形での現れに過ぎない」(p.174) という多一論的な信仰の自由を表面上求めているものの、実際には「ダルマ」の概念を国家的アイデンティティに矮小化し、排他的な言説に変貌させていることを力説している。他方、RSS ではどのような部局がサング・パリワールの統括・指導を担当しているのか、具体的な言及があればと感じた。

第4章「身体のパリティクス」では、RSS が草の根レベルで最も重視するシャーカー活動について議論を行っている。著者はシャーカーが国家の為に献身的でいつでも動員可能な国民を創造する意図の下に行われている、と看破する。著者は続いてニューデリーでのシャーカー活動を取り上げ、シャーカー参加者が必ずしもイデオログの語りに感化されて参加しているのではない点も指摘している。この部分を読んだ限り、シャーカー活動を行う末端のリーダーは地元から輩出されているという印象を受けるが、彼らの人事に RSS 指導部がどのように関与しているのかという説明があれば、より興味深い内容となったであろう。

第5章「サバルタンの公共性とヒンドゥー・ナショナリズム」は、サング・パリワールの一つで、都市部の経済的に貧しい人々への奉仕活動を行っているセワー・バーラティの活動の紹介を中心においている。著者はセワー・バーラティの学校で働く女性教師の意識に RSS の政治的主張が感じ取れないことから、サング・パリワールの活動が活発化す

ることをもって「インドがヒンドゥー至上主義化している」と短絡的に認識することを戒める一方、裨益する住民も状況応答的に HN を利用していると分析している。しかし、紹介されたような福祉活動を実施するには相当額の資金が必要である。資金の流れや資金提供者への用途開示状況にも触れてほしかったと思う。

第6章「ヒンドゥー・ナショナリズムと暴力」は、HN 運動においてしばしば暴力事件を起こす「実行部隊」バジュラング・ダルの活動を取り上げている。著者は、彼らが起こす暴動には聖職者らを通じ神話による宗教的正統性が与えられていることを指摘しつつ、それだけではなく下層中産階級青年層の自己顕示欲が逸脱的行為に表出している、と見る。さらに、彼らの暴力行為の形成・拡幅過程におけるメディアの関与を重視している。

第3～6章は現地でも取材が困難な RSS やサング・パリワール諸団体の実態を、時には組織の内部へ入りこむ綿密なフィールドワークに基づいて報告しており、その際ヒンディー語固有名詞にも逐一解説を付して好感がもてる。そして、HN に参加する民衆が必ずしも RSS の拳揚するイデオロギーに同調しているわけではなく、両者間には齟齬が存在することを繰り返し述べている。その一方で、HNst の「融通無碍な柔軟さ」(p.163) によって全体として民衆がアイデンティティ・パリティクスに収用され、異教徒への敵愾心が刷り込まれることへの著者の懸念も一貫して表明されており、論旨は明瞭である。しかし著者の HN 定義が「おわりに」

の項に至らないと披瀝されない点(p.351), その明瞭さを減じているようで残念である。また、フィールドワークを都市部に限って行っているため、農村部での HN 分析については今後の課題として残してあるという印象を受けた。

以上、各章を概括するとともに評者の断片的な希望を述べたが、それらは「ないものねだり」としかいえない部分もある。理由は本書が HN の末端レベルに注目し、HNstの言説と運動への参加者の思惑の違いを、丹念にインドの人々と話すという最も確実な手法によって実証した前例のない著作だからである。特に、著者が政治学者による HN 研究を「末端の活動家と住民のインタラクションに注目した研究は皆無に等しい」(p.73)と評しているのは傾聴すべき言葉である。この点の実証作業の必要性は指摘されることはあっても、実際に取り組まれることは少なかった。本書最大の価値はそこにあるのであり、本書が多くの人々に読まれることを望む。

これらの点を評価したうえで、気がかりな点を指摘しておきたい。それは著者の概念用法に混乱が見られることである。

たとえば、著者は第1章において世俗化論を批判的に検討し、これを克服する方向性として「ポストモダニストによる権力批判の視点をしっかりと引き上げつつ、多一論的な宗教多元主義のあり方を追求していくこと」(p.33)を打ち出している。この考えは前著において示された、「私はダルマの復興こそ、インド社会がポストコロニアル的状况…を打破する重要な要素であると考えている」[中

島 2002: 48] という著者の立場の継続・発展を示しているが、問題はここで従来の世俗化論が宗教復興の心性の高まりを説明できないことへの批判と、ダルマによるインド社会のポストコロニアル的状况打破という著者の願いが融合されてしまっている点である。そのために、「学問研究において社会で宗教の果たす役割が重視されてこなかった傾向への批判」と「世俗化された社会において宗教の果たす役割を回復しようとする動きへの共感」とが区分されない議論に陥ってしまっている。実証作業段階においては科学的概念と実践の概念の峻別が行われるべきではなかろうか [佐藤 1995: 105]。

類似の傾向はセキュラリズムに関する議論についても認められる。「宗教を私の領域にとどめ」(p.90)る方向性をもつからという理由により、著者は西欧のセキュラリズムへ批判的な眼差しを向ける。しかし、インド国民全般に「セキュラリズム」がそのように了解されているかは検討の余地があり、むしろ単純に「宗教の差異によって差別しない」という一般原則として理解されている可能性も考察するべきではないだろうか。国民会議派のポピュリストの政治が HN 運動の興隆を後押ししたという事実は (p.109)、政治家が原則としてのセキュラリズムに違反したことへの反発とも解釈できるのである。

結局、評者の抱いたこうした感想は、本書が著者の研究成果であると同時に、著者の多一論的な宗教多元主義という思想発露の場となっていることに起因すると思われる。こうした宗教観については、非常に深淵なテー

マであり、ここで評者に判断しきれるようなものではなく、大いに議論の余地があるだろう。

次に、著者は HN 運動の高揚を「宗教の活性化という世界情勢のなか」(p.26)で「現在世界的に起きている宗教ナショナリズムの勃興の一つ」(p.352)と捉えている。著者が第1章でインドのみならず欧米のナショナリズム論をも渉猟しているのはその観点からであろう。しかしインドの宗教的多数派によって担われる HN 運動は、しばしばクリスチャンなど少数派に対する迫害行為となって現われる。それはいわば「弱い者いじめ」であり、運動に参加する人々の切迫感は薄い。これに対し、たとえば昨今の一部のムスリムによる「自爆テロ」は自らがその「成果」を見ることをも放棄するほど激しい行為であり、これら両者を同じ枠組みのなかで把握してよいのか、という疑問は残る [関根 1999: 201-202]。但し、著者は「宗教の活性化という世界情勢のなか」でHN を位置付ける作

業を本書では行っていないので、今後の論の発展が待たれるところである。

最後に、表現上の注意を付記しておきたい。本書には「現パキスタン領であるアーザード・カシミール」という表現があるが(p.226)、同地域は「パキスタン実効支配地域」とすべきであろう。

引用文献

- 佐藤成基. 1995. 「ネーション・ナショナリズム・エスニシティー歴史社会学的考察」『思想』8.
- 関根康正. 1999. 「現代インド社会における宗教と政治—セキュラリズムとコミュニズムという難題」木畑洋一・姫田光義・古田元夫・北川勝彦・栗田禎子・清水 透編『〈南〉から見た世界 02 東南アジア・南アジア—地域自立への模索と葛藤』大月書店.
- 中島岳志. 2002. 『ヒンドゥー・ナショナリズム—印パ緊張の背景』中公新書ラクレ.
- Turner, Bryan S. 1994. *Orientalism, Postmodernism and Globalism*. London: Routledge.
- (近藤高史, 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)